

18 ホウレンソウ

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	17	

※前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えるものとする。

(1) 特徴と吸収特性

ホウレンソウは、栄養生長体である茎葉を生育最盛期に収穫する野菜であり、**比較的多肥を好む作物**である。生育期間は基本的に短期間であるが、作型によっては種から収穫まで約30～60日と幅が広い。養分吸収量は、目標収量を2,000kg/10aとした場合、10a当たり窒素11kg、リン酸3kg、カリ14kg程度である。なお、ホウレンソウは生育に比例して窒素吸収量が増加するため、**品質保持（葉色維持）のためにも収穫時まで窒素の肥効を無機態窒素で5mg/100g乾土以上確保**する必要がある。

施肥量は作型によっても異なるが、**10a当たり成分で窒素17kg、リン酸12kg、カリ15kgを標準量**とし、前作の残存施肥を考慮して決める。栽培期間が最短で播種後25日程度で収穫できることから、全量基肥を基本として追肥は原則的に実施しない。

ただし、降雨などにより肥料養分が溶脱し肥切れを生じると収量が低下しやすいため、**生育状況のみて液肥または尿素の葉面散布**を行う。10a当たり収量は、春まきで1,200～1,500kg、夏まきで800～1,000kg、秋まきでは1,500kg以上と作型によって差が大きい。また、生育期間は夏まきで短くなる一方、秋まきでは長くなり、季節別の養分吸収量は高温期よりも低温期に多くなる傾向にある。そのため、**夏まきでは高温に伴う地力窒素の供給量増加発現も考慮し、標準施肥量に対して窒素施肥量を2割程度減らし**、秋まきでは窒素施肥量を3～4割程度増やすとともに場合によっては追肥を行う。

ホウレンソウにおける欠乏症の発生は土壤に由来することもあるが、土壤の酸性化やアルカリ化により必須成分が不可給態化していることが原因になることが多い。ホウレンソウの葉脈間が退色して品質が低下する「すかし症」はマンガン欠乏によって発症するとされ、高温期の露地栽培で、降雨直後に収穫適期となる株で多く発生しやすい。マンガン含有量が低めの土壤では、pHが高まることによりマンガンが不可給態化して欠乏しやすくなる。このため、すかし症の発生軽減には土壤pHを6.2～6.5の範囲に適正化し、マンガン資材をMnO換算で15kg/10a程度施肥すると有効である(平成2年普及技術)。

目標収量と養分吸収量の例

目標収量(kg/10 a)	養分吸収量(kg/10 a)		
	窒素	リン酸	カリ
2,000	11	3	14

表 作型別肥料施肥基準

作型	標準施肥量に対する増減	備考
春まき	—	・標準施肥量
夏まき	20%減肥	・栽培期間短い ・高温に伴う地力窒素の供給量増加
秋まき	30～40%増肥	・栽培期間長い ・場合によっては追肥を実施